



陽光を浴びる学生たち（1933年）

8. 旧制高校の生活

1950（昭和25）年に四高の最後の卒業生を送り出してから、すでに60年以上をすぎていますが、同窓会活動などを通じて、その在りし日の思い出が語り継がれています。白線帽にマントと下駄、寮歌を謳歌するファイヤーストームや街頭ストームなどを、旧制高校のイメージとして思い起こす年配の方も多いでしょう。金沢市民に愛された四高生でした。

旧制高校を特徴づけるキーワードは自由と自治です。これは四高を含むいわゆるナンバーズクールに顕著でした。とくに「自治」の語は、四高の代表的な寮である時習寮に扁額として掲げられ、いまでも四高の校舎を利用して作られた石川四高記念文化交流館に展示されています。



四高生徒のノート

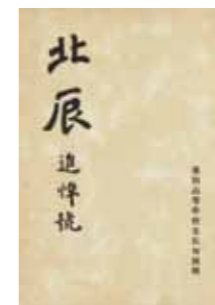


時習寮記念祭祝賀行列（1934年）

四高の校風としては「超然」（超世脱俗）も有名です。社会や世俗から超越して、高潔な精神のもとで生きることを目指すというものです。これは、1906（明治39）年に起こった時習寮の南寮の火災後に、寮生たちの間で流行したのがはじまりと言われます。1908年には「超然趣意書」が寮生らによって示され、次第に四高の校風として定着していきます。

四高の学生は北辰会という学友会組織に属し、さまざまな活動を行いました。とくに運動部の活躍は、北辰会の最も重要なものでした。野球部、柔道部、剣道部などの運動部は、日々研鑽を積むとともに、他校との対抗試合にしのぎを削りました。三高、六高、八高などとの対抗戦は南下軍とも呼ばれ、その時に歌われる「南下軍の歌」は、寮歌「北の都に秋たけて」と並び、四高生らに親しまれました。また、1941年に起こった琵琶湖における漕艇部遭難事故は、多くの人々に悲しみの記憶として刻まれています。

昭和に入り、戦雲が立ちこめるようになると、社会主義的な研究会への弾圧が加えられたり、軍事教練の導入、北辰会の報国団への改編、学徒勤労働員、学徒出陣など、時代の波に翻弄されていきます。そして、戦後、廃止に至るまでの数年間に最後の光芒を放ちました。



【北辰】（1942年）
漕艇部遭難事故追悼誌



【南下軍】（四高柔道部の稽古日誌）